

“The Folklore of Shiratayu at Ise
—Okashirashinji at Yamada and Onmyoji—”

Abstract

This thesis shows the folklore of Shiratayu at Iseyamada, referring the actual situation of Okashirashinji and Hachioji belief. From the legend, I explain the function of Onmyoji, who was involved in the festival at Ubusunahassha, and the nature of the legend.

数喰事あり、「西星寮より米式石出す」。寄附地も有る、「松木氏より参詣。凡二ツ御造酒備ル」。右之旧記有之所なれば、松木春彦白大夫大明神、菅丞相の筑紫にて御別れ被遊候節、為御形見、御姿彫刻し、御姿絵姿の石壹ツ給り、白大夫袂に入れ、筑紫より帰らせ給ふ。壹ツの石此社地に納祭り給ふ所、大石と相成により、袂の天満宮とも崇め祭る。又鎮守共奉祭り、正五九月には、松木氏より御供備る。菅丞相御姿は京都宮様に有之。御姿絵は山田の原箕曲の郷匂村にも有之と云。松木氏の支配せらるゝ社地なれば、町屋に縁無之。殊更大神宮の鬼門を守る社地なれば、かなる敵も押寄来る事叶まし。宜隠れ家と、きん女は西星寮に預け、森のかたわらに、秀次公、三橋夫婦、子共、居住せらるゝ様と、厚く松木氏の預御介抱、年月を送る。秀次公禪門の御取立の儀厚く思召、此所の尊を福一万虚空蔵を写し、七堂伽藍を建立有之。有増出来仕、雁道寺と名付け、京都より治部大輔を呼迎、諸事取繕給ふなれ共、兎角世の中おたやかならず、敵大軍せめ寄る由を聞召して、秀次公驚き給ひ、治部大輔にともなわれ、都へ登り給ふ時、伽藍は火を掛け焼失いたす。その節きん女、三橋へ御申置は、君御行衛知れかたき時は、瑞岳応禪大善神と祭るへしとなり。欣女は地下の尼共に、寮に住居して、師を頼、尼となり、又は堂建立を願給也。三橋弥右衛門女房おさよ一子弥市郎、二男五郎市、右の森に住居して、松木氏の家来と成り、百姓を勤る。町家の役儀をゆるされ、年月を送るなれ共、歎ヶ敷は、御主君秀次公、都へ登り給

ひ、御逝去の月忌も不相知れ、松木御長官より、大神宮古材木にて此所の尊の社壇建立有て、松木の御宗行寄附多有之、宮寺と成る。金剛夫路女路の謂有之。森の在名をかた取江西山金剛證寺と云なり。其後秀次公、高野山において御逝去、文祿四歳七月十五日也。三位法印一路子と号す。尾州知多郡筑阿弥の二男御年二十八歳、御治世五年の間、秀吉公十五歳の内を云。大老菅原宗利大江、当地瑞岳応大善神是なり。年号月日を不記。

中興開山如欣禪尼、勢州度会郡伊良胡村祖元尼の妹、小久保禪阿弥之娘也。西之寮にて逝去、寛永十六年十月十六日行年六十九歳、右如欣尼西之寮にて金剛證寺を開、寮は地本神主末、比丘尼地本之神主領地を松木氏より分け被下、相続を定る。西星寮の持地配分して慶金庵を造り、弟子住居して金剛證寺に住職する。

総領弥市 五兵衛

二男五郎市 五郎兵衛

本書は巻物なるを借受縮写したるもの

嘉永三年五月十七日

御巫尚書

「船江三橋氏旧記」

元祖三橋氏は、三州白井並柳郡出生にて、猿狭山に引籠、三橋弥右衛門好集、三橋彦兵衛好唯は、由緒有る侍なれば、秀次公へ加勢し家臣と成り、勢州度会郡伊良胡崎へ、秀次公趣給ふ時、奉供仕、伊良胡崎に引移り居止りける。此伊良胡崎と伊良胡村家之境、三河之國渥美郡、勢州度会郡との境、堀切り候処有之。近家に小塩の津日の出の在所なと、云て旧跡多し。此伊良胡崎に小久保禪阿弥と云ふ人の娘祖元と云尼有之。寮の名は深泉禪庵と云。祖元の妹おきんと云女、美女にして秀次公へ宮つかへさせ、年月を送るに付、主君禪門に貴得有之。祖元尼には右両郡の境へ寺を氣着せ給ふ。祖元開レ之、山城之國中(京トアリ)治部大輔と云仁を呼迎、祖元禪庵にて伊良胡大明神、両国境の大明神、本躰を彫刻して寄附有之。右渥美度会両郡に御鎮座なし奉り、大神宮の末社にて、昔より松木氏春彦長官白大夫大明神の勧請也。右之趣、荒々秀次公御取立にて、伊良胡村糟谷六郎左衛門漁網引取之、御墨附被下置、此外由緒有之所也。其後山田原へ御趣之思召立有之、三橋弥右衛門好集は御供仕、三橋彦兵衛好唯は祖元尼に被差添、名字を石橋と御改被下、伊勢の渡海を石橋を掛渡らむと御悦氣に有之、右六郎左衛門、小久保清右衛門、小久保重郎右衛門、用意の船を以、伊勢山田の湊へ送る。御主君秀次公に相従ひ、きん女弥右衛門並女房おさよ一子弥市郎伴ひ、山田の原へ来る。右両郡

二社大明神の由緒を以、松木氏へ落着、預御養育、兎角秀次公、禪門に御氣付厚く、軍を嫌ひ給ふ。松木氏へ御頼有之により、松木氏の仰には、山田の原箕曲郷は、むかしより白大夫大明神の領せらるゝ地なりと云共、今にては所々に旧跡の場計にて、箕曲の郷の内隴ヶ池の辺り、河の神水の神を祭る社地有之。右之池の流れを隴川と云て、此所に森あり。旧跡にて土公の神を祭り奉ると云。社地此所之尊と申奉により、大神宮の鬼門を守る神、御鎮座と云所也。森の名は奥西郷と云り。むかしは地本の神主も有之となれ共、今は比丘尼寮に住ひ、此寮を西星の寮と云て、むかし春日大明神、少将井天王彼利賽女の御姿を彫刻し、則春日大神の御姿を写し、宇法童子御姿とを、此寮に祭り奉り、松木氏の領せらるゝ森なり。右の由緒ある社地なれば、森のくね等のかきは、古例にて西村の善蔵、奥所孫市と云者の一類より勤来る。右垣を仕に出る時は、菅人に米壺升宛の飯をもち相渡す。善蔵方より飯をもちに来る。いため麦を食する事あり。正月廿八日、右の人数神事に集る五穀の鏡を送る。大神宮九月十六日御神事に用る竹、此森より納める。八月八日此所の尊の神事にて、五穀のだんこをにぎり供へ祭る。右のたん子さしてゆりに一ツ案主取に参る。常葉坊へだんこ酒豆腐を送る事あり。森の双方往來の道は、奥所百姓中打寄りこしらへる。木枝をきりて薪とする。茶と甘酒を送る。正月六日此所神祭にて、右の人数喰事あり「松木氏より鏡餅かちぐり、かき備り参詣」、七月十三日同所少将天王を祭り、右の人

の神をまつる上御井社がある。祭神は度会氏の遠祖・天村雲命である。上御井について『宇治山田市史』(上巻)はつぎのように解説している。「皇大神宮・豊受大神宮の日別朝夕の大御饌に供する御料水で、上古度会神主の遠祖天村雲命が高天原なる天忍石長井水を持ち降りて、筑紫の日向の高千穂峯の井水に注ぎ入れしを、次に丹波国真奈井原に移し、豊受大神の此の地に御遷座の時、また此処に移されたものと云ふ。井の上にある殿舎は上御井社で、天村雲命を祭っている。此の御井に異変ある時は、次第を経て上奏し、朝廷では陰陽寮に於て軒廊の御卜と云ふを行はしめ、勅使を立てて神慮を伺はしめ給ふ旧例もあった。」水を司る天村雲命は、度会氏の遠祖と仰がれていたのである。『神名秘書』には、「天牟羅雲命 度会氏遠祖也。高皇産靈神弟神皇産靈神六世之孫也」とある。

(14) 兩宝童子は朝熊嶽金剛證寺の護法神。室町末期以降、天照大神の化身とされた。「旧記」は金剛寺を「金剛證寺」と記している。ともに虚空蔵菩薩を本尊とする真言宗寺院であったこと、「兩宝童子」をまつっていたこと、伊勢神宮の丑寅にあって、大神宮の鬼門を守る神の鎮座していたことからすれば、金剛寺と朝熊嶽金剛證寺は、かつて何らかの関係にあった(たとえば本寺・末寺の関係)かと思われる。

(15) (16) 『参宮の今昔』(「神都宇治山田」一五「山田の産土神と御頭神事」)
(17) 山本ひろ子は、牛頭天王・八王子祭文が郷社の陰陽師らによって制作され、実際の祭や修法で使用されたと指摘している(「牛頭天王島渡り」祭文の世界)『異神—中世日本の秘教的世界』所収)平成十年三月

(18) 堀田吉雄「伊勢の獅子神楽の系譜」(『堀田吉雄論叢集』所収)平成六年九月

(19) 本田安次『天文本伊勢神楽考』(「天王の哥」(著作集第七卷)

(20) 本田安次「伊勢神楽之研究」(著作集第七卷)

(21) 村山修一『日本陰陽道史話』昭和六十二年二月

(22) 柳田国男「唱門師の話」(『定本柳田国男集』第九卷所収)

(23) 『北野神記』には、「白大夫」・「門内白大夫殿」の記事があげられている。(応永十三年奥書) (『北野天満宮史料 古記録』)

・「白大夫」 文大夫ノ御孫豊彦ノ事トモ申、淨妙尼トモ申トカヤ、所詮白大夫ト申御名ハ夫ノ豊彦ノ御事也、当社ニハ酒飯ヲ奉獻シ給シハ女房ノ尼御前ト可意得也、夫婦ノ不同ト申ヘキ歟、伊勢ノ祠官ニテ御坐ケルカ、当社ノ筑紫へ御下向ノ時下リ給タリト申者也、家内酒泉五穀蚕養并旅宿ハ此神ニ可祈申也、御本地不空牽羈索(索) 観音ニテ御坐也、

・「門内白大夫殿」 当社ノ竈殿也、諸社ニ在之、白大夫ノ一樽ノ飯ヲ当社ニ奉獻給フ、是ヲ因縁トシテ竈神ヲ祝加タル也、故ニ白大夫殿トハ申セトモ三社御座也、竈神者系図如下、

(24) 『参宮の今昔』(「神都宇治山田」一五「山田の産土神と御頭神事」)。箕曲社の場合、久保倉右近家が差配した。御頭神事一切は、この「結果」の指図を受けることとされていた(『宇治山田市史』下巻「第一章 年中行事」)。

ここに「船江三橋氏旧記」を翻刻しておく。嘉永三年五月十七日、御巫尚書が書写したものを、大正十三年五月二十六日、あらためて御巫清在が写したものを、「旧記」を書写した御巫尚書とは、清直のこと。文化九年、外宮御師の家に生まれ、明治二十七年に没した。八十三才。天保九年外宮御巫内人に補し、明治四年職を退く。御巫家塾を開き、国書を講じて多くの著述を残した。

これが「旧記」のいう「箕曲郷が白大夫大明神の領地である」ということの意味であろう。

さらにいえば、松木氏は、春彦を度会氏の祖霊としてまつり、山宮祭に加わってきた。金剛寺の白大夫明神もまた、春彦を度会氏の守護神とする点で、山宮祭の祖先祭祀とひとつづきのものである。春彦を度会氏の祖先神と仰いで、山宮祭はもちろん、産土社の御頭神事にも奉仕してきたのは、山田の陰陽師である。春彦を「陰陽道信仰の人」とよぶ意味はそこにある。金剛寺にある白大夫の「袂石」伝説は、祝言や祈祷・卜占のわざに携わった山田の陰陽師の活動の跡であろう。かれら陰陽師は、白大夫が持ち帰った「袂石」を、依代として仰ぎ、祈祷のわざにしたがっていたと思われる。

「旧記」から読みとれるのは、箕曲郷船江の御霊神に仕えた陰陽師と巫女（比丘尼）の活動の跡である。船江はかつてこうした巫祝の徒の拠点であったと思われる。そこに金剛寺は開かれ、大神宮の鬼門を守る地とされたのである。その地に根づいて生長したのが、北野天神という御霊神に仕えた白大夫春彦の伝説である。箕曲郷船江の御霊神に仕えた陰陽師によって、この伝説は伝えられたのである。

〔注〕

- (1) 拙稿「度会春彦本縁―度会氏の祖先祭祀―」（『東海学園 言語・文学・文化』第七号）平成二十年三月 同「宿神としての妙見童女像―度会氏の祖先祭祀と胞衣の祀り―」（『東海学園 言語・文学・文化』第九号）平成二十二年三月
- (2) 本田安次「伊勢神楽之研究」（著作集第七卷『日本の伝統芸能』所収）平成七年四月
- (3) 『石屋本縁記』は、『両部神道集』（真福寺善本叢刊6）の「高庫藏等秘抄」に紹介された。
- (4) 前掲拙稿（1）。
- (5) 永池健二「歌占と白大夫―菅江真澄白大夫説追攷―」（近畿大学日本文化研究所編『日本文化の鉤脈』所収）平成八年三月。拙稿「伊勢の白大夫伝説―御師と伊勢比丘尼―」（『東海近世』第十七号）平成二十年三月。
- (6) 拙稿「伊勢の白大夫伝説―御師と伊勢比丘尼―」（『東海近世』第十七号）平成二十年三月。中村幸彦に「白大夫考―天神縁起外伝―」（著作集十卷所収）がある。
- (7) 松木時彦は『神都百物語』（七十「大善神」）のなかで「船江三橋氏旧記」を紹介して、「きん女に関わる部分は三橋氏旧記の如くで大差はなからう」と述べている。
- (8) 松木時彦は、金剛寺が比丘尼寺であった所以とともに、松木氏の「支配寺」であったことも記している（『神都百物語』）。
- (9) 『三重県の地名』（『箕曲郷』の項目）平凡社・歴史地名大系
- (10) 『宇治山田市史』上巻（『地誌篇第四章「朧が池」の項』）
- (11) 『宇治山田市史』下巻（『神社篇第二章「船江上社」の項』）
- (13) 外宮坂垣北御門の西、藤岡山の麓に上御井の井水（忍穂井ともいう）

かれる以前から、「土公の神」や「少将井天王彼利賽女」をまつる巫祝の徒がいた。その社地に船江上社が勧請され、境内に箕曲氏がまつられていた。山田の陰陽師は、この氏神に仕えて、卜占・祈祷のわざにしたがい、祝言の獅子舞を演じたのであろう。

(六) 白大夫伝説と陰陽師

金剛寺は、船江の「西星の寮」の跡に開かれ、境内の巨大な台石には、白大夫の伝説が伝えられてきた。前にも引いた「旧記」の記事を改めて示しておこう。

松木春彦白大夫大明神、菅丞相の筑紫にて御別れ被遊候節、為御形見、御姿彫刻し、御姿絵姿の石壹ツ給り、白大夫袂に入れ、筑紫より帰らせ給ふ。壹ツの石此社地に納祭り給ふ所、大石と相成により、袂の天満宮とも崇め祭る。又鎮守共奉祭り、正五九月には、松木氏より御供備る。

筑紫にて道真より給わった形見の石―道真の姿を刻んだ石を、白大夫は袂に入れて持ち帰った。金剛寺の境内に、この石をまつると、成長して大石となったので、これを袂の天満宮と崇めたという。ここに白大夫・度会春彦の祠「白大夫大明神」も勧請されたのである。度会二門の松木氏は、この石を「鎮守共奉祭り、正五九月には、松木氏より御供備る」というふうには、供養を怠りなくつづけてきた。

金剛寺に白大夫大明神を勧請したのは、度会二門の松木氏であると

しても、その神祭に奉仕したのはだれか。これについては、まず京都北野天満宮の末社「白大夫社」のことから述べねばならないのだが、今はその余裕がない。概略だけを示してみる。『北野神記』（応永十四年奥書・一四〇七）²³によれば、北野の白大夫社は、伊勢神宮の祠官度会豊彦をまつるといふ。白大夫は、道真が罪をえて筑紫に下向するとき、ともに下ったと記録されている。あるいは北野社に、白大夫が一握りの飯を奉献したゆえに、当社の竈神としてまつられた。ここが北野と伊勢の白大夫伝説をつなぐ重要な観点であると思う。竈神は陰陽師の奉ずる神である。北野に白大夫社がまつられる背景には、竈の清浄を守り祈祷をおこなってきた陰陽師の活動がある。おそらくかれらが白大夫を竈神と奉じてきたのであろう。

金剛寺の旧地・箕曲郷船江には、船江上社がまつられ、御霊神に仕える巫祝の徒（陰陽師・巫女）がいたことは先にも述べた。船江の地・金剛寺に勧請された天満宮と白大夫明神の祭にしたがったのは、御霊神を奉祀する山田の陰陽師である。神宮の鬼門を守る地にあつて、度会春彦を白大夫神と奉じて、祈祷・卜占にしたがっていたのである。八社の御頭神事のまつりを宰領したのは、外宮の御師たちである。かれらは「結衆」という頭仲間を組んで、まつりの運営にあつた²⁴。その差配のもとに、陰陽師は産土社のまつりにしたがったのである。結衆の宰領のもと、箕曲氏のような山田の陰陽師が、金剛寺の巨大な石を「袂の天満宮」とまつり、白大夫の祠をかまえて神祭をつづけてきたのである。おそらくかれらは松木氏の支配下にあつたのであろう。

ふ 千代も経ぬべし

・天王八王子婆利賽女じやくどく 鬼神に千代の御神楽参らする
八王子の御霊神が祭の庭によび出され、神楽によって清められる。
そこに陰陽師が加わって、まつりの庭を祓い清めたのである。ここに
うたわれる「八王子」が、外宮の産土八社である。伊勢神楽の詳細は
本田安次によって報告されているが、まず竈清めの湯立てによって祭
の場が清められ、祝詞が読みあげられる。⁽²⁰⁾この竈清めの庭に八王子の
社人としてつらなつたのが「巫」（陰陽師）なのであろう。

八王子社の陰陽師については、『神宮典略』（「八王子社祝」）が、
つぎのように説明している。ここにいう「八王子」は、宇治中村の産
土社をいう。

此社は神宮に拘はらず、村人の沙汰なれば、社祝の代りに巫をも
て仕へしめしならん。二門（※度会氏）氏社には博士の祝詞を申
すよしを記したり。かく巫といひ博士といふのは、男巫にて、今
の世にはゆる陰陽師の事なり。「今も此社は其村の陰陽師此社
の祭を預かれりと云。」委しく知りがたし。

陰陽師が、八王子社の神職にかわって、祝詞をとなえたというので
ある。しかし、「今も此社は其村の陰陽師此社の祭を預かれりと云」
というものの、陰陽師がどういう役割で祭に加わっていたのか、残念
ながらその詳細は不明というしかない。村山修一は、民間の法師陰陽
師であった声聞師が、「牛頭天王の祭文を読んで疫神祓いをしたり、
病氣平癒の祈祷をしたり、算占をした」と指摘している。⁽²¹⁾これに照ら

せば、産土八社の陰陽師が、御頭神事のおりに『八王子祭文』を読み
あげ、祈祷をして疫神祓いのわざにしたがっていたことはまちがいな
かろう。

しかしながら山田の産土八社の祭に加わった陰陽師の実態は、なか
なかとらえがたい。ただ山田の陰陽師については、『三方会合諸旧例
書』（神宮文庫蔵）にその名が記録されている。

一、曆陰陽師拾四人

但シ先年ハ箕曲主水、保利田山城、若太夫三人陰陽師ニ而残りハ
白人二候処、追々土御門家相頼、官名申請候事、

箕曲主水、箕曲主計、飛鳥帯刀、瀬川舎人、中川図書、山口右
兵衛、村松左京、富田大貳、中地外記、宮崎左近、西嶋左門、
箕曲主膳、中川隼人、保利田山城

ここに名前のおがる三名の陰陽師は、箕曲氏社に仕えて、卜占・祈
禱のわざにしたがっていたのであろう。箕曲氏は、外宮の御師の家で
はないが、箕曲氏社に属して、御頭神事に奉仕した巫祝の徒であった。
かれらは正月十五日の御頭神事のときに、外宮北御門橋前にて獅子舞
を演じて、見物した外宮のお子良から、夷扇一本が与えられた（『神
宮典略』十五「獅子舞」）。柳田国男によれば、かれら伊勢山田の曆陰
陽師は、毎年除夜に外宮玉垣門の外に押しかけ、密を投げ込んで帰っ
たり、氏子の家を廻って、祝言の舞を演じたりした。⁽²²⁾

ここで思い起こされるのは、金剛寺の前身、恵康尼の比丘尼寮のこ
とである。船江奥西郷の森に河原淵社があって、ここに比丘尼寮が開

メント宣フ。仍今日蘇民将来カ子孫ト称テ御幣ヲ捧テ供物ト獻掛
ヲソロシク御座ス。東王ノ父王西王ノ母天及所生八王子ノ眷属諸
神等證知納受セシメ給ヘト申。

つづいて、山田郷の氏人の安穩泰平と氏子の息災延命とを祈念して
祭文は結ばれる。このあと産土社の社人は、家々を廻って獅子舞を演
じた。この社人の列に加わったのが産土八社に属する陰陽師であり、
かれらが『八王子祭文』を読みあげたのである。この神事は、山田に
疫病の流行したとき、祓いをしたのが始まりだという（『毎事問』）。

蘇民将来の故事にならって、箕曲氏社の氏は、厄除けを祈って「蘇
民将来の子孫」の札を、家々の門に飾ったという。

堀田吉雄によれば、「度会郡の宮川の両岸に沿って、御頭神事は分
布しているのである。元来は山田（伊勢市）に発祥したものであった
が、山田では今は衰えてしまった」という。⁽¹⁸⁾ スサノオノミコトや牛頭
天王を祭神とする山田の産土八社に、郷民は疫神退散を念じてきたの
である。正月十六日の前後三日にわたって祭はおこなわれ、十五日に
は、山田の市中の所々で、獅子舞が演じられた。堀田は、御頭神事の
面白さは、夜の「打ち祭」にあったという。その特色は火祭りにあっ
て、正月のしめ飾りがすべて焼き払われたのである。祭が終わると、
橋の上で太刀を伐ち払った（『宮川夜話草』巻之四「御頭神事」）。「打
つ」という行為には、「眼に見えないもろもの邪悪なるもの、いわ
ば一切のマガツミをうち砕く」という意味があり、そこに「夜の打ち
祭の本義」があると堀田は指摘している。むかしは、蓆でかたどった

獅子頭を、祭が終われば焼却したという（『宮川夜話草』）。

この火祭りは、正月十五日の小正月の行事、「塞の神送り」といっ
ていい。村境に災いをなす邪霊を送り、村人の除災と健康を祈るので
ある。御頭神事の打ち祭が、橋の上で行われるのも、境界の「塞の神
祭」の古義を伝えている。

（五）伊勢山田の陰陽師

山田の陰陽師は、御頭神事のみならず、神楽の庭にも列なっていた。
前述したように霜月十六日、常明寺の法楽神楽（伊勢神楽）に、「巫
が加わっていた。ここにいう「巫」とは、産土社の陰陽師である。こ
の伊勢神楽に「天王の哥」の一曲があって、「八王子」が讃えられる。⁽¹⁹⁾

・ いや大宝天王我が君は いや位は高くて中の間に いやはりさ
いちよの公達はいや左や右に御座します

・ いや此の村に齋はれます村の神 いや御霊の御前に遊び参
らん

・ いや八王子は嶺に留みぞ（まり）御座します いやみす吹上げ
の寒き所に

・ いや八王子の摺り召す衣結びおろし いや神のもりら（子）に
着せて舞はせん

・ いや氏は命全かれ いや平なる石の丸になるまで

・ いや此の御前に参り進まん（むる）かげもよし いや祈りも叶

社、今村社、牛頭社、箕曲社、落獅子がそれである。落獅子というのは、天から降ってきた獅子頭を八つに綴りあわせたもので、この一座だけには社地がない。御頭神事について『神民須知』（久志本常彰）は、つぎのように記している。

山田郷産土神社々有。大社、藤社、茜社、坂村社、今村社、牛頭社、箕曲社、落獅子〔此一座社地無〕。総テ八社也。（中略）

夫レ山城ノ国祇園ノ社ハ素戔嗚ノ尊ニテ、牛頭天王トモ武塔天神トモ申ス。行疫ヲ払ヒ除ルノ神徳マシマス。其昔山田郷疫癘流行ノ時、人民此ノ神（※産土神獅子）ヲ祭り疫癘ヲ免シニ由テ即郷々ノ産土神ト崇祀シナルベシ。俗ニ尾頭ト云ハ獅子也。祇園ノ社ニ獅子有。（中略）此ノ祇園ノ獅子ニ倣ヒ、山田産土神社モ祇園ト同神ナル故、社ニ獅子ヲ納メ置。正月十六日其社々神事ニテ獅子出テ、其産土ノ封域ヲ廻リテ獅子舞ヲナスナルベシ。（後略）

ここに名前のおがる八社は、八王子社ともよばれ、祇園の神・スサノオノミコトをまつる（『神民須知』・「八王子」）。八王子とは、牛頭天王と龍王の娘・婆利采女の間に来た八人の王子であり、行疫神として畏れられた（『牛頭天王縁起』）。この御霊神をまつるのが、山田の産土八社である。この氏神八社は、それぞれに獅子頭をご神体のように奉じて、年々のまつりごとをつづけてきた。『毎事問』によれば、船上社社の境内社・箕曲氏社の獅子頭は、天文四年に造られ、茜社の獅子頭は、永禄二年に彫られたと伝えられる。これは「山田十二

郷の八産生神の御頭神事は、恐らく室町時代以降に至って始まった」という説と見合っている。⁽¹⁶⁾ 陰陽道の盛行した中世に、産土各社が、競って牛頭天王、八王子をまつり、獅子頭の神事をとりおこなったのである。それならば御頭神事とは、疫神を鎮める御霊の祭であったとみてよい。

井坂徳辰『神境郷社天王八王子配祀考』（神宮文庫蔵・慶応四年）によれば、正月十五日の御頭神事には、産土八社の氏人が参集して、八王子祭文が読みあげられた。⁽¹⁷⁾ 祭文は室町時代、永禄の頃から読みあげられてきたが、制作された時代はもっとさかのぼるといふ

右八王子祭文ハ、箕曲社ニ用ヒタルモノニテ、勤役ノ名長ノ人名ニ拠テ考フルニ、永禄ノ比ノ祭儀ニ読ム所ト見エタリ。然レドモ祭文ハ、其時代ニ作リタルモノニアラズ。古来相伝ヘテ用ヒシ文ナル事疑ナシ。（中略）此祭文ニ拠テ見レバ、産土神社八王子祭ニハ、其郷居住氏子ノ禰官等始トシテ上中下ノ氏人村人悉参集シテ、祭儀ニ預リシ事知ラレタリ。

ここには箕曲社の祭について述べられている。このとき読誦された八王子祭文については、その詳細は不明であるが、神宮文庫蔵『八王子祭文』の一部をここにあげてみよう。「八王子祭文再拜」で始まり、前半に「牛頭天王縁起」が述べられる。

時ニ武答天神玉并所生八王子ノ誓如レ此蘇民将来申テ云末代ノ衆生何蘇民将来カ子孫トシラシメ奉ラント申。神王宣ク茅（チガヤノ）輪ヲ作り右ノ腰ニ着ケシメヨ。註（シルシ）トシテ守護セシ

鄭重にまつて、洪水や早魃の害の少なからんことを祈念したのである。怖ろしい威力を発動する御霊は、一方では、障碍の侵入を防ぐ神でもあった。「旧記」は、これら御霊の神をまつる船江の地を、「大宮の鬼門を守る神」の鎮座する処と記録する。崇りなす御霊神は、外宮を守護する威力ある神とも信じられ、まつられてきたのである。これら「土公神」や御霊神のまつりにしたがったのが、後述するように古来の河原淵社（のちの船江上社・箕曲氏社）の神に仕えて、水神祭祀をおこなってきた陰陽師と考えられる。

箕曲郷船江に「西星の寮」は建てられた。寮とは、本来、寺院の学寮であるが、恵康尼はこの比丘尼寮を金剛寺として再興したのである。

今は比丘尼寮に住ひ、此寮を西星の寮と云て、むかし春日大明神、少将井天王彼利賽女の御姿を彫刻し、則春日大神の御姿を写し、

宇法童子御姿とを、此寮に祭り奉り、松木氏の領せらるゝ森なり箕曲郷の郷民は、河原淵社のむかしから「少将井天王彼利賽女」を彫刻し、「春日大神」、「宇法童子」の姿を写してまつてきたといふ。⁽¹⁴⁾

これらの神々に、洪水や疫病の害から逃れることを、かさねて祈ったのであろう。「旧記」を読みすすめれば、「奥西郷」の森にまつられた土公神や御霊神は、洪水や疫病から度会氏を守る神々であったことがわかってくる。それならば「西星の寮」の比丘尼は、本来、これら御霊の神に仕える巫女であったと考えられる。この寮の跡地に恵康尼は、金剛寺を開いたのである。

ここで「旧記」の要点を整理しておこう。

① 箕曲郷は、むかしより松木氏の領地であった。

② 「奥西郷」の森にまつられる船江上社は、水の神をまつる。

③ 船江上社の境内社箕曲氏は、度会氏の遠祖「天牟羅雲命」をまつる。

④ 船江の比丘尼寮を、恵康尼が金剛寺として中興開基した。

⑤ 金剛寺は、神宮（外宮豊受宮）の鬼門をまもる。

⑥ 金剛寺に菅神の祠が勧請され、白大夫伝説が残る。

松木氏の保護のもと、神宮（外宮豊受宮）の鬼門をまもる地、船江に金剛寺は開かれ、その境内に度会氏の遠祖・度会春彦が、白大夫明神としてまつられた。これが「旧記」の語る金剛寺の来歴である。しかし、不明なことはいくらかもある。たとえば、箕曲郷が白大夫大明神の領地である、とはどういうことか。断定はできないが、おそらくは山田箕曲郷の氏人が、白大夫度会春彦を神と仰ぎ、まつりをつづけてきたことをいうのであろう。そのように考えれば『藤園雜纂』が、春彦を「陰陽道信仰の人」とするのはきわめて示唆的である。ならば金剛寺の白大夫伝説と陰陽師がどのように結びついているのか、山田の行疫神のまつりについて論じてみよう。

(四) 山田産土八社の御頭神事

山田には八所の産土社があり、それぞれに獅子頭を蔵し、これを御頭と称して、ご神体のように尊崇してきた。⁽¹⁵⁾ 大社、藤社、茜社、坂村

かない。伊勢神宮の北東（丑寅）、「大神宮の鬼門を守る社地」に金剛寺は建てられ、そこに「袂の天満宮」の祠が勧請された。ところがその理由がはっきりしない。つまり誰が「袂の天満宮」を鎮守としてまつりごとをつづけてきたのか。それを含めて不明なところは多い。まずは白大夫大明神の領地であったという箕曲郷に、かつてどのような神まつりがおこなわれてきたか、「旧記」を史料として考えてみよう。

(三) 箕曲郷船江の行疫神

「旧記」によれば、「山田の原箕曲郷は、むかしより白大夫大明神の領せらるゝ地」であった。つまり金剛寺は、白大夫春彦の領地であった箕曲郷船江の地に開かれたのである。箕曲郷の郷域は、現伊勢市吹上・河崎・船江・馬瀬町、現御菌村王中島など、勢田川中下流域左岸一帯に及ぶ。⁽⁹⁾ 勢田川や宮川の氾濫によって、たびたび洪水に洗われ、川の流れが変わるたびに、水害に悩まされてきた土地である。以下に述べるように、この地に水の神がまつられたのも、箕曲郷の右のような立地と結びついている。「旧記」は、そのあたりのことを、

箕曲の郷の内臈ヶ池の辺り、河の神水の神を祭る社地有之。右之池の流れを臈川と云て、此所に森あり。旧跡にて土公の神を祭り奉ると云。社地此所之尊と申奉により、大神宮の鬼門を守る神、御鎮座と云所也。

と記している。臈ヶ池とは、船江上社の前の池で、宮川の分流がこ

を貫流して勢田川に注いでいた。⁽¹⁰⁾ この池の水は、どんな旱魃のときも、涸れることはなかったという。ここにいう「臈ヶ池の辺り、河の神水の神を祭る社地」とは、船江上社のことであろう。古来、当社は河原淵社とよばれ、河原社、杜社（毛理社）とともに、水の神（澤姫神）をまつってきた。⁽¹¹⁾ その河原淵社の旧地に、産土の神として船江上社が勧請されたのである。

船江上社の境内にある箕曲氏は、いずれの頃から洪水にあったとき、船江町天神浜に漂着した社をまつたと伝えられ、俗に流社と称した。⁽¹²⁾ 『二宮管社沿革考』は「箕曲氏社」について、

此社ハ長徳檢録ニ曰ク、箕曲ノ氏社ト云ヘリ。寛文三年諸社再興ノ時当社モ造管アリ。（中略）土俗流社と称ス。（中略）「杉の落葉」ニ云ク、昔洪水アリテ此社流漂シ、幸田ノ辺ニ流レ止リタルヲ、俗ニ流社ト呼来リ、

と記している。当社は山田の産土八社のひとつで、度会氏の遠祖・天牟羅雲命をまつってきた。『神境秘事談』（享和三年）によれば、度会氏の神官の家では、正月のしめ飾り「蘇民将来子孫門」の札にかえて、「天村雲命」と書くこともあった。「天村雲命」は、祇園の牛頭天王と同じく、水を司る御霊神の神格を有すると考えてよからう。⁽¹³⁾

「旧記」はつづけて「此所に森あり。旧跡にて土公の神を祭り奉る」と述べる。臈ヶ池の近くに「奥西郷」の森（今、俗にいう檜木尻の森か）があつて、「土公の神」、すなわち川の神、水の神、沢の神がまつられていたという。「土公神」とは、崇りなす障礙神である。それを

は俗に白大夫と称し、菅原道真の流罪にしたがって、筑紫に下った。帰国のおりに播州袖が浦にて小石を拾い、袂に入れてもち帰ったが、その石、年々長大となつてついに巨岩に成長したので、これを台石として小祠を造り、菅原天神をまつたという。

右の話は、成長する石の伝説であり、全国に類話も多い。柳田国男編『日本伝説名彙』は、これを「袂石」としてのせている。なぜ金剛寺にこの伝説が伝わるのか、廃寺となつたままでは、その来歴はたどりがたい。寺伝と思われる史料が残されているものの、その記述だけでは真偽もさだめがたい。『宇治山田市史料 寺院編1』（伊勢市立図書館蔵）の「金剛寺」の項目に、「船江三橋氏旧記」（以後、「旧記」と略記する）として記録されるのがそれである。三橋氏について詳細は不明であるが、三河に生まれ、豊臣秀次に仕えて家臣となつた、と「旧記」はいう。御巫尚書が、嘉永三年五月十七日に借覽して写したものを、御巫清在が、大正十三年五月にあらためて書写したのが、この文書である。『宇治山田市史料』は、その概略をつぎのように記している。

寺伝ニ云フ弘法大師ノ開基ニシテ真言宗ナリシガ、其ノ後漸次ニ
衰運ノ傾キシニ、文祿四年（三三二年前）十二月恵康尼再興シテ
禅宗臨濟派トナリ、代々尼僧タリ。恵康尼俗名きんト云ヒ、豊臣
秀次ノ妾ニシテ、文祿三年、秀次山田ニ落チ来リ、松木神主家ニ
寄食シ、後チ当寺ニ潜居セシガ、翌年京都ニ帰ル日、きん女ト会
シテ落飾シテ当寺ヲ中興セシムト。

文祿三年、豊臣秀次が松木神主家の庇護をうけて、伊勢山田の箕曲郷に潜伏していたとき、寵愛をうけた「きん女」なるものが、落飾して恵康尼となり、金剛寺を再興した。「旧記」は、いちおう縁起の体裁をとっているが、なにやら一篇の貴種流離譚のようでもあり、どこまで事実を伝えるのか、おぼつかない。とりわけ秀次が伊勢に来たつて三橋氏のもとに匿われたなどという史実はない。ただ伊良湖小久保禅彌の女きんが、出家して如欣禅尼となり、金剛寺の中興開山となつたことは信ずるに足る、と松木時彦は述べている。文意の通じがたいところがあつて不安も残るが、まずは「旧記」の語る白大夫伝説に注目してみよう。

松木春彦白大夫大明神、菅丞相の筑紫にて御別れ被遊候節、為御形見、御姿彫刻し、御姿絵姿の石壹ツ給り、白大夫袂に入れ、筑紫より帰らせ給ふ。壹ツの石此社地に納祭り給ふ所、大石と相成により、袂の天満宮とも崇め祭る。又鎮守共奉祭り、正五九月には、松木氏より御供備る。菅丞相御姿は京都宮様に有之。御姿絵は山田の原箕曲の郷匂村にも有之と云。松木氏の支配せらるゝ社地なれば、町屋に縁無之。殊更大神宮の鬼門を守る社地なれば、いかなる敵も押寄来る事叶まし。

「旧記」の特長は、松木家と白大夫春彦のつながりを強調するところにある。金剛寺は、松木氏の庇護をうけて建てられたという。松木氏の「支配寺」といわれるゆえんである⁽⁸⁾。それにしても、なぜ金剛寺に白大夫伝説が伝えられるのか、これだけの説明では不明というし

およそ推察できる。

妙見堂ノコト石屋本縁二載スル故事覚東ナキコトナリ。但シ高主
モ春彦モ陰陽道信向ノ人ナリ。尤モ妙見星ヲ祭ルコト、此頃一般
ノ風儀ニテ、山宮祭ト云フモ太山府君ヲ祭ルナリ。山宮祭ト云コ
トハ山君祭ト称ヘタル山君ヲ山宮トナセルニテ、山君スナハチ太
山府君ノ略称ニテ北辰星ノコトナリ。

高主・春彦父子は、度会二門の人。松木、楡垣、宮後、久志本など
は、二門の家である。以前、論じたことなので省略するが、山宮祭は、
妙見星に度会氏の繁栄を祈る祖先祭祀である。⁽⁴⁾ 注目すべきは、高主・
春彦父子を「陰陽道信向（信仰）の人」とするところである。もちろ
ん「岡崎宮妙見本縁」（妙見堂の縁起）は、度会系図が記録する春彦
の事跡とは異なる。⁽⁵⁾ 「石屋本縁二載スル故事覚東ナキコトナリ」と記
されるように、山宮祭の故事は、あくまでも伝承にすぎない。しかし、
たとえ伝承にしても、一族を率いて山宮祭を主宰した春彦が、陰陽道
信仰の人とされるのは、どういふわけであり、どんな意味をもってい
るのか。前稿では、占トや祈祷のわざにしたがう陰陽師が、度会春彦
を奉じてこの祭に加わっていたことを、いささか指摘しておいたのだ
が、本稿はそのつづきにあたる。

もうひとつ、春彦には別の伝承が残されている。『勢陽五鈴遺響』
（度会郡「岡崎宮」）は、山宮祭について述べたあと、白大夫伝説のこ
とを記している。

春彦ハ度会氏ニシテ菅右府道真公ニ扈從セシ白太夫ノ事ナリ。既

ニ洛陽北野菅廟ノ本殿ノ前東ノ傍ニ白太夫祠ト云アリ。社伝云勢
州神主春彦霊也ト云。本府ニハ彼神霊ハ松木町ノ松木社ニ祠レリ。
松木ヲ称号トスルカ故ニ其族ノ奉祀スル処ナリ。

度会春彦は白大夫と称して、筑紫に流された菅原道真にしたがった
という。京の北野天満宮の白大夫社だけでなく、伊勢山田にも白大夫
の祠がまつられていた。そればかりでなく、外宮神官家の松木家は、
度会二門春彦の末裔として、白大夫春彦を祖先神とまつり、菅公の図
像さえもち伝えてきた（『宮川夜話草』）。

伊勢神宮の御師が、白大夫伝説をもち歩いて、伊勢信仰をひろげた
ことを、かつていささか論じてみた。⁽⁶⁾ しかし、外宮の御師が伝説をもっ
て歩いたとしても、その詳細はかならずしもあきらかではない。少し
視点をかえて、今回は、伊勢の白大夫の伝説が、山田の陰陽師とどの
ようなかたちで結びつき、かかわっているのか、ひとつの資料を紹介
しながら考えてみたい。

（二）金剛寺の白大夫伝説

山田船江町の金剛寺は、弘法大師の開基になる真言宗寺院であった。
文祿四年（一五九五）に再興されて臨濟宗の尼寺となったが、明治に
尼僧が還俗して廃寺に帰した。本尊虚空蔵菩薩の堂前に菅原天神の祠
があり、壇上の巨岩には白大夫の伝説が伝わっている（『勢陽五鈴遺
響』）。いまその大略だけをここにしめしておく。度会神主の祖、春彦

伊勢の白大夫伝説

— 山田の御頭神事と陰陽師 —

小林 幸夫

〔キーワード〕

白大夫伝説 御頭神事 産土八社 八王子信仰 山田の陰陽師

〔要約〕

伊勢の祠官・度会春彦には、白大夫の伝説が付会されている。『菅原伝授手習鑑』にしてもこの伝説にもとづいて脚色されたのである。伊勢山田にも白大夫の「袂石」の伝説があって、金剛寺の縁起と結びつけられて伝承されてきた。本稿では白大夫伝説を、当地の御頭神事と八王子信仰の実態に即しながら論じてみた。そこから産土八社のまつりに携わった陰陽師の活動と伝説の性格を明らかにしようとしたのである。

(一) 白大夫・度会春彦の伝説

度会春彦を奉じて、妙見星をまつた外宮の山宮祭については、いくたびか論じてきた⁽¹⁾。その祭に、春彦を奉じた「陰陽道信仰の人」が

加わっていたことも、ここでいささか言及してみた。ただその陰陽師の実態については、くわしく述べる余裕がなかったので、あらためてここで論及してみたい。

古来より外宮では、毎年十一月十六日、伊勢山田（現伊勢市）の常明寺で、大神宮法楽の神楽が奉納されてきた（『常明寺縁起』⁽²⁾）。これは五穀豊穰を感謝する霜月神楽であった。

雄略二十二年、外宮御幸臨已来太神宮法楽神楽、此山毎年十一月十六日⁽³⁾後夜物⁽⁴⁾詣此寺⁽⁵⁾百余人神楽男巫八乙女翻⁽⁶⁾羅綾袂⁽⁷⁾内宮八十末社外宮四十末社深秘歌唄哩哩有楽詞拍子也。誠是天巖戸前八百万神達集給、太神宮法楽砌面白曰于⁽⁸⁾今不⁽⁹⁾絶事難⁽¹⁰⁾有云々

常明寺は、明治の廃仏毀釈で廃寺となつて今はないが、寛永年間、天台宗に改宗する以前は、真言宗であった。薬師如来を本尊として、間の山の古市近くに広大な伽藍をかまえていた。この神楽に加わる「巫」が陰陽師である。かれらは神宮にはなく、山田の産土社に所属して氏神の祭に奉仕していた（『神宮典略』「八王子社祝」）。

同じく毎年十一月中旬、外宮の山宮祭がとりおこなわれた。山田妙見堂の縁起「岡崎宮妙見本縁」（『岩屋本縁記』所収・神宮文庫蔵）によれば、仁和四年十一月十八日、度会春彦が氏人とともに、妙見尊星王の靈託により、清浄山に妙見大菩薩をはじめとする神仏をまつたことをもつて、山宮祭のはじまりとする。この祭に山田の陰陽師が加わったことは、『藤園雜纂』（神宮文庫蔵）のつぎのような記録から